

防災だより

～みんなで広める防災の環～

日本は、他の国に比べ、気象、地形、地質などの自然条件から、地震、台風、洪水、火山噴火、土砂災害などの災害が起こりやすく、これまでも度々大きな災害に見舞われており、佐井村においても過去に豪雨・豪雪・土砂災害などが発生しています。

このことから、防災に関する情報をお知らせし、自主防災力の向上を目指します。

津波防災教育と避難 ～大津波災害から岩手県釜石市子どもたちに学ぶ～

「東日本大震災」では主に大津波によって2万人以上もの犠牲者を出す大惨事となりました。しかし、学校での津波防災教育に積極的に取り組んできた釜石市では、児童・生徒ら約3,000人が自らの判断・行動をもって生き抜きました。

釜石市での津波防災教育は、自然災害とどう対峙するか、自然とどう向き合うべきか、その姿勢を育むものであり、その教えは以下の「**避難三原則**」に集約されます。今月号は、津波の被害が大きかったにもかかわらず、ほぼ全員が生還した釜石市鵜住居（うのすまい）地区での行動について紹介します。

原則1：想定にとられるな

学校での津波防災教育で、まず児童・生徒が教えられたことは、「想定にとられるな」。端的に言えば「ハザードマップの情報がすべてではない」ということです。

自宅が浸水想定区域から外れていたとしても、ハザードマップに示されるとおりの津波が来るとは限らないため、「大丈夫」と考えることは大変危険です。与えられた想定にとられず、自分で状況を判断し、行動することの大切さを子どもたちは教えられていました。

原則2：その状況下で最善を尽くせ

釜石東中学校の生徒が東日本大震災のときにとった行動です。

約5分におよぶ長く激しい揺れにより停電し、学校の放送設備が使えず、避難の呼びかけができない中、地震の最中から校庭で部活動をしていた生徒たちは、「津波が来るぞ、逃げる！」と校舎に向かって大声で叫びながら校庭を駆け抜け、ほかの生徒もこれに続きました。

一方、隣接する鵜住居小学校の児童は校舎の3階に避難していました。日頃から一緒に避難訓練をしていた中学生が一斉に避難する様子を見て、児童らは校舎を駆け下りあとに続き、児童・生徒の行動は近隣住民も巻き込んで中学校から直線距離で1km以上先の石材店に避難し、大津波から命を守り抜きました。この時の津波は校舎の屋上をはるかに超えるもので、指定避難所の「ございしょの里」にも3mの高さを超える津波の痕跡が残っていました。

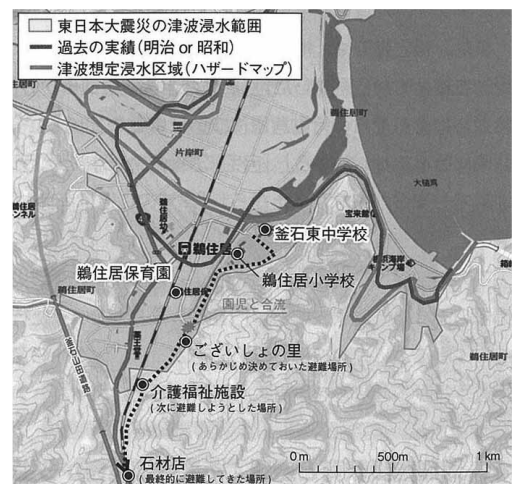


図 鵜住居地区の生徒・児童の避難経路

原則3：率先避難者たれ

人間はいざというとき、なかなか「逃げる」という決断ができません。

大津波の場合、避難を躊躇していたら、皆その犠牲になってしまいますが、自分が「率先避難者」となり避難することで、周囲もそれに同調して避難を開始し、多くの命を救うことができます。

鵜住居地区においても大挙避難する児童・生徒の行動が、結果として周りの大人たちの命も救いました。

以上が「避難三原則」の概略です。今回は津波災害に関する情報でしたが、佐井村は海と山に囲まれていることから、津波災害のほか土砂災害の危険性があります。普段から、災害に応じた避難場所を確認しておきましょう。

※認定特定非営利法人日本防災士機構「防災士教本」より抜粋

【お問合せ】総務課 管財係 担当：竹内

防災クイズ

防災は“自助・共助・公助”の基本理念のもと成り立っています。この3つの“助”において、「自分の命は自分で守る」という言葉は何にあたるでしょう？

①自助 ②共助 ③公助

※答えは広報紙の最後のページで確認できます。